

ことが多いようである。そして進駐軍においても、初めは、日本人が、いかなる舉動を取るであらうかといふことを心配して、警戒した點もあつた。今日だん／＼親しく知り合ふ機會を得るに當つて、何事もなく過されている有様である。何故に、初めアメリカ兵の到來を怖れたかといふと、それは主に軍人からの宣傳であつた。思ふに中國やフィリッピンその他において、相當殘虐な行ひをなした自分達の體驗から推察して、アメリカ兵も敗殘國民に對しては、我々以上の極端な殘忍行爲をするのではあるまいかと想像したところから、自分達に緣故のある家の老人や子供や婦人に、早くどこかへ立退くことを勧誘したものである。今日から見れば、こつけない事柄でもあつたが、それは結局、外國人を信用しないといふ心理が禍したものである。そして知らない同志の間には、『人を見れば泥棒と思へ』といふやうな心理が働いて、飛んでもない結果を起すものと、解釋しなければならぬ。

この問題は、我々に國際的・道徳的意識の足りないことを示すものである。從來、島國根性として、ば／＼いはれたが、それは、約三百年間の鎖國時代に、我々に養はれた心理状態である。しかも封建制度の下に藩制は布かれ、諸地方に垣根を作つて、知合の人々が城下に住み、交通も不自由であつたから、知らない人に會へば、うるんの人間と考へる心理的習慣を作るに至つた。かくて

國際關係の意識は全く養はれなかつたのであるから、外國人とか人類とかいふものに對して、いかような態度を取るのが道徳的であるかなども考へられてゐなかつたのである。明治維新以來、開國して今日に至つたのであるが、三百年の久しきに亘つて作り上げられた島國根性は、何かの形でどこにか動いてゐることを觀察せざるを得ない。外國人に對して、ひがむとか、疑ふとか、人間が違ふように考へて、一面には恐怖し尊敬するような態度を持ちながら、他面においてはこれを馬鹿にし、自國民だけが優秀であるように考へる自慢根性のあるのは、今後、本當に世界列國と並んで世界の舞臺を廣く渡るについては、根本的に、拭ひ去らねばならない心理的缺陷である。

第十二章 人種的偏見

前章の最後に述べたことは、この問題に關係がある。人種的偏見といふことは、どの民族國民にも多少ともあることである。アングロサクソン民族とか、ラテン民族とか、スラブ民族とか、チュートン民族とか、世界にはたくさん民族があり、それが小分けされて、國民を成しているもので、それぞれ固有の文化もあり、習慣もあり、従つて特質もあるので、それに偏見も伴うているかも知れない。けれども、多少合理的に人類の生活を考へ反省的に自國民を見るものは、その極端の姿を呈しないであらう。常に國際關係が頻繁であつて、他國民が互に交際し得る機會の多い國民にとつては、偏見は少いと想像される。もとより各國民に文化の相違はあるので、特色あることは、それぞれ認められていることであるが、自國民が一番優秀の國民であるとか、他國民は下等であるとか、夷狄禽獸であるとか唱へて、自國民自慢の夢に耽けるものは少ないように思はれる。大體において、外國と孤立してゐる民族乃至國民においてその傾向が強いと觀察される。

かつて比島に行つたときに、或島にモロといふ民族があり、その民族は特殊の誇を持ち回教の堅い信者であつて、他の民族を、排外的にくみすべからざるものとなし、極めて強い優越感を抱いてゐる人種であることを聞いた。然しその他の比島人が、モロ族を本當に優秀なものであると見なしているのではないが、かれらにかゝる癖見があるので、比島全體の團結を成すのに、故障があるといふ話を聞いた。排外的な思想は、未開の民族で孤立的な生活をしているものにあるのを常とするが、我々日本人を顧みたときに、そういふ癖見のなほ我々に存するかと思ふと、いさゝか恥しくも感ずる。もつとも民族が、一個の文化的特色を持つた獨自の存在をなすには、相當の自負心を持つていなければならぬ。自暴自棄の國民では、どうすることも出来ない。世界の舞臺に存在するだけの價值はあり、何かの貢献を人類、文化の上になし得るといふ覺悟と確信を持つべきは、いふまでもない。そこに文化の特色を發揮すべきは當然である。けれども、それは他の文化國といろ／＼の面と比較考察して、どこに缺點長所があるか、客觀的に判斷し得る事柄でなければならぬ。ただ頭から自分の國は偉いのである。自分達はいはゞ神から選ばれた民族である。最も高尚な道徳性ある存在であるといふ風に、自慢氣に自國を誇ることは、偏見といはねばならない。我國が久しく世界から離れた孤立生活をしたことは、井戸の中の蛙といふか、

世界を知らずに御國自慢の傾向を養つたことも、一應自然の勢といへるであらう。明治維新以來は、外國の文化を受け、外國の科學や哲學等について、充分に彼等の優秀性を知つてゐるはずであるが、過去十數年間においては、鎖國時代と似たような獨りよがりの思想が、甚だしくはびこるに至つたことは、人の知るところである。我が民族は、本質的に優秀であるといふ觀念が、あまねく語られるに至つた。眞に心からそれを信じているものは、國民の間にとの位あつたであらうか。少しく物の道理を理解している人々は、簡単にさういふ考へを持たなかつたであらう。戦時中においても、日本國民の教養の足りないことは識者の間に語られ、多々外國の道德や科學について學ぶべきものゝあることを、述べているものもあつたが、官憲の高壓的な思想宣傳によつて、自國自慢の氣分は大いに高められ、民族的な優越感が流布された。即ち我國は神國であるとか、人種的に特別の使命を持つ神聖な國民であるとか、道德性については最も優秀な素質を持つてゐる國民であるとか語られた。さすがに科學、思想、藝術等については、優秀な國民とは語られなかつたが、民族そのものが他國と類を異にした、いはゞ選民であり、道德性に優れてゐることは、強く主張された。國民の多數は相當さういふ風に考へた。これは、敵愾心を増し、戰意昂揚といふことになるかと考へたからであらう。ただ官憲がさように説いたからとて、そのことがた

やすく國民に信ぜられるはずはないが、大體において、幾千年來東洋の孤島に住んだ民族として、唐天竺のうはさよりは、世界のことは知らなかつたのであるから、自國の民族が一番優秀であるといふ主張は、どこかに養はれてきたものと思はなければならぬ。その心持が外交においても、軍事においても心理的に禍をなして來たことは、見逃せないことである。さういふ偏見から脱却するのぞなければ、世界と協調し得る平和國家を作ることには出來ない。

連合軍司令部の日本占領の主旨とするところは、ポツダム宣言に基づいて、軍國主義的思想を掃するにあるとせられる。その思想的原因の一つは、日本國民の人種的偏見であると解される。神國日本といはれ、八紘一字と語られ、東亞の指導者と自稱し、外國は鬼畜の如き存在であつて、日本國民は殊に道德性に優れてゐるといふ非科學的な非國際的な自國本位の極端な國家主義的思想は、軍國主義的思想を生み出す根源であると考へられてゐる。その思想が、軍國主義と論理的必然的に結合すべきものであるかは、多少の解釋を要するとしても、諸外國を道德的に下に見下すといふことは、彼等を従へなければならぬといふ思想とも、轉化してくるのは、一應うなづけることである。しかも頭から道德的に他國民を劣等な民族であるとみる思想そのものが、實は道德的といはれない。かゝる排他的な、さげすむ態度は倫理道德の建前ではない。國際

意識を健全に養はしむるものではない。それ故に、かゝる思想は、國際的に各民族が敬愛の念を以て、共にたづさへてゆかねばならない今日の時代においては、拭ひ去らねばならない考へである。けれども、從來深く根本的に考へ及ばざるためでもあり、久しく孤立した獨自な存在を遂げて來たためでもあるが、自國自慢といふ人種的な偏見思想が國民の間に養はれて、それが國際的道義的な精神を養はしめず、向ふ見ずの戦ひを起し、この大敗を招くに至つた原因と見なければならぬ。

神話は古い國にはどこにもある。各國の神話によればそれぞれ神祕的な起原を持つてゐる。この民族も自國民だけが神より選ばれた民族であるといふような考へを持つてゐる。これは自己保存の衝動として原始的な民族信仰の中に表れてきたことと思ふ。誰も知る如く、我國には『古事記』及び『日本書紀』があつて、神代のことと述べてゐる。こゝにこれを語る必要はないが、天照大神の皇孫が高天原に降臨されたといふ記事が、日本國建設の初めになつてゐる。それから神武天皇までは上古の時代といはれ、その後は歴史の時代と語られるが、初めの十數代はほとんど雲霧の中に閉された記事で、もとより歴史的事實といふことは出來ない。故にこれらの語り傳へは傳説として保存されるだけで、これに科學的な民族心理學的な、また考古學的な研究

と批判とは、充分に施されて然るべきであるが、過去十數年の間は、これを批判することも出來なかつた。その記事は、そのまま今日の歴史につながる眞實の事實と認められた。これは學者がしたわけではないが、官憲がその時の國民の思想指導のために決定したものである。これに協力した學者の無見識の甚だしきは、笑ふにたえたことであつたが、當時の彈壓的空氣から、さういふ風な思想傾向に固定された。實に悲しむべき思想生活であつた。實は明治初年においては、神道とは日本の古俗であるといふ説も唱へられ、また天地自然の現象になぞらへて、日の神月の神、その他の神々の解釋も施され、極めて科學的に社會學的に取扱はれたこともある。また日本民族は南方から來たとか北方から來たとか、その混合になるとか、種々の考古學的解釋も施された。従つて、『古事記』や『日本書紀』の物語を、その文面通りに眞實の歴史の記事として受取るものはなかつた。その記事の内にある國民の心理的傾向については、民族心理學的に今日にまで共通し得るような性質を見出し得るとしても、それは側面的解釋であり内面的批判であつて、神話はただ神話とされてゐたのである。最近のやうに、これを動かすことの出來ない、少しでも批判することの出來ない、嚴めしい史的事實と認めるものはなかつたのである。もつとも明治の時代においても、科學的な社會學的な取扱について非難をいふものもないではなかつたのであ

るが、明治時代は大體において、啓蒙的な合理主義的な時代と認めて宜しい。然るに時代が變換して、他國を敵對的に見なければならぬような時世になつてからは、急にかゝる廣い自由主義的な思想の天地は却けられて、全體主義的な思想官製的な時代となり、飛んでもない結果を生ずるに至つたわけである。これらは、明治以來外國人と交際して来たとはいふものゝ、昔からの島國根性の下地に禍されて、狭い固苦しい國家觀を成すに至つたものである。

かゝる偏見による思想宣傳は、教育教化の當面に責任を持つ人々によつて、全國に遍く施された。これも、上からによる命令ではあるが、そして或は心ならずでもあつたかも知れないが、とにかく、國民一般殊に青少年の批判的科學的思想精神に、禍を與へたことは、少からざるものと推察する。今日、時代は急轉して人種的偏見を排した民主主義の國民生活となつた。然し、私はしばしばいふことであるが、誰がよく、民主主義の思想を、新に國民の間に説く者もあるであらうか。中には識見のある人もあると信するが、從來指導役に立つてゐた人々は、かゝる偏見の持主である。また實に今日も、本當に倫理的に思想的に民主主義の何であるかを、平易にはつきりと國民の間に説く者は少いように思ふ。また相當にこれがために努力されても、過去十數年間、かゝる偏見思想を以て攻められた國民乃至青少年が、どれだけ本質的に民主思想の何であるかを

語り、過去の思想の間違ひであつたかにもさめるには、極めて難しいことであることを想像せざるを得ない。急に二年や三年で、急回轉をした時代についての堅實な思想が養はれ得ることは、期待出来ない。然し、何とかして今後努力を重ねて、この新しい思想を國民の心の奥底から納得せしめ、自分の考へとして出發し得るように指導し啓發し、また各自が共々に反省し修養しなければならぬ。

かようにいつて來ると、日本國民は、本當に頭から尻つぽまで、優越感を抱いた、濃い人種的偏見を持つた民族の如く思はれるが、實は必ずしもそうでないことに、一種の矛盾を感じざるを得ない。一面にはかゝる優越感を持つてゐるが、他面には劣等感をも持つてゐる。通用しない獨りよがりの優越感を持つてゐるのも困りものであるが、劣等感を持つてゐるのも困りものである。もつとも批判的に考察して、この點においては自分等が勝つてゐるが、あの點においては劣つてゐると、恰も競技を観察するように、客觀的に語るならば、當然である。自己の長所と短所とを認識することは、極めて大切である。それが改良進歩の原動力である。けれども、全體的にとつて、日本民族は他の民族より優秀であると威張つてゐるかと思ふと、實は外國人の方が一枚上の人種であるといふように考へて、卑屈の態度を持つことになつては、賞めたことではない。それ

らの點については、充分に客觀的に比較して批判考察すべきである。我々の間には外國人を一口に人種的に劣つた人間の如くに見る氣持があるかと思ふと、他面には舶來品が尊ばれるが如く、外國製品は日本品より總て上であると見ると同じように、これを作るだけの外國人は我々より優秀な民族であるとして、何となく彼等には敵はないといふような感じを持つてゐる。文化財といふ事物についての比較から、劣れるものは劣つてゐると見るのは、正直な態度であり、むしろ結構なことといはねばならないが、それと共に、何となく外國人は我々より優れた民族であると、運命的に考へるようになることである。一方では、何も判らずに空威張りする態度があるかと思ふと、他方にはとても敵はぬとさじを投げるような態度があることは、國民の心理生活に矛盾があると認めなければならぬ。極端な優越感と極端な劣等感に通ずるものであつて、とても敵はぬと思ふ相手に對して、威猛高に惡罵して、大いに威弱つた勢を見せることは、弱き者の一つの特徴であるかも知れない。いざといふことになれば、逃げ出すわけであるが、初當りの場面においては、大いに氣勢を揚げて見せるといふやうなことは、劣等感を持つもの、優越感的表現である。眞に實力あるもので、別に驚くにも騒ぐにも當らぬとすれば、平凡に淡々としてその場面を過し得るわけである。どこか心に弱みを感じると、これを隠すために、思ひ切つて威勢

良い調子を見せるなどのことは、心理的に觀察し得る現象である。或は我が國民に相當この劣等感がひそんでゐるのではないかと心配する。表面的には優越感が高く大いに叫ばれてゐるので、これによつて種々の過ちを生じ、殊に國際關係については、尊ぶべき協調の精神を失ふことにもなるが、内々に劣等感を抱いてゐては、實際生活の處理の上に、結局大失敗を招くに至るのは、當然である。

とにかく、人種的偏見に囚はれてゐることは、國際生活の上に、積極的にも消極的にも多くの障害をなすことは、争はれない事實である。これには愛國心といふ要素も伴つてゐるのであるが、極端な愛國主義は、國際協調の精神に悖るものであり、引いては國內生活にも禍するものである。國內生活において、互の人格を尊重し調和的に生活するのが當然であるが如く、國際的には人類として互に尊重する精神を以て處すべきは當然である。これは平和時代においてのみならず、軍國時代といふ如き、敵味方として相まみえる場合においても、かゝる人道的精神は持たねばならないと思ふ。戦争は殺し合ひであるから、それこそ一生懸命にあらん限りの力を出して戦はねばならないのであるが、その間においても、彼等の人であり國民であり、家族の一員であり、人間としての道徳性は備へてゐるはずのものと考へて、然るべきである。既に戦ふといふ以

上、戦ひの方法は盡されねばならないが、退いては同じ人間であるといふ人格尊重の精神は持たなければならぬ。これは互に捕虜になつた場合とか、非戦闘員に對する場合とか、赤十字病院に對する場合において、かゝる態度は發揮されねばならない。これは國際法規に示されてゐる條項であるが、何故にかゝる國際法規が規定されたかといへば、本質的には各國民の世界心に基つたものである。戦ひながらも、人類としては、お互に良く判り合つて、正しい生活の道を取らなければならぬといふ人道的精神の存在することに、基づくものである。

戦時中に出來た『戰陣訓』には、軍人としての心構えも書かれてあるが、その中には、絶対に捕虜になつてはならない、それは我が軍人道の否認するところであると示されてゐる。然るに、外國においては捕虜になることも、止むを得ないとされてゐる。こゝに道德觀についての相違がある。捕虜になることが、命も惜しく、早く樂に成りたいといふ了見で、その本分を盡さず、敵軍に降るならば、非難すべきことである。そんな頼みかひのない兵隊では、戦争は出來ない。然し、もしなすべきをなして本務を遂げたと思ひ得るならば、生命の貴重なることを信じて、降伏するのも當り前である。そこには良心的な苦痛もないわけである。これが、諸外國人の常識であると思ふが、我が軍人訓においては、それが少しも認められていない。それには、人種的偏見と

か優越感とかいふ思想が潜んでゐるのではないかと觀察する。また他面からいへば、外國人を異人種であるが故に、これを道德的に信用しないといふ思想態度が含まれてゐるのではないかと思ふ。捕虜になれば、きつと殺されるにきまつてゐる、きつと虐待されるにきまつてゐる。外國人は、異人種的偏見を持つてゐるので、日本人を酷使するにきまつてゐる。世界に、一番優れた日本兵が捕虜になるのは、見つともないことである。何としても討死の一手よりないといふ考へであらうと思ふ。それは道德的に人種的な偏見を持つてゐる證據であると思ふ。外國人を信用することが出來ないからでもある。他面から觀察すると、氣が小さいので、そういふ場面が怖ろしく想像され、何でも死ぬと考へられるのかも知れない。人格的な信を腹中に置いて、おびえずに軍門に降るといふようなことは、考へられないのかも知れない。何れにしても、この點に考への相違のあることは、人種的偏見の心理的要素が相當に働いてゐると觀察される。もつとも討死とか自刃とかいふことは、古來からの武士の風であつて、それが死をおそれないとか、名譽を重んずるとかいふことになつてもいるが、この場合には國內戦とはちがつて、相當強い人種的偏見が働いてゐると思ふ。

こゝにいふ心持は、軍人の人生觀について解剖的に批判したのであるが、もしこゝにいふ思想態度

が我々の心的生活のどこかに働いていて、何かの作用をなすとすれば、互に人類として、公平な人道的精神を抱いて、國際生活を圓滿にとけていくには、思はざるところに幾多の誤解が生ずることがあるかも知れない。新時代においては、我が國民の國際的意識を開拓することは、極めて大切なことである。今日は閉された國民生活をなしてゐるが、將來海を越えて遠く行くことの出る場合においては、國家の將來を背負ふ青少年を、外國に送つて國際的な經驗と識見とを養はしめねばならない。

第十三章 神祕的思想傾向

これはいひかへると、神がよりの思想傾向でもある。この問題は前項の人種的偏見思想の中に優越感として語られたものであつて、日本は神國であり、神の後裔としての皇室があり、人民は神の子供の分れたものである。世界中に日本の國程立派な國はないといふ思想で、先にも述べたやうに、『古事記』や『日本書紀』に書かれてある記事は、そのままに事實として受取られ、それにいろいろの理窟が註解されてゐる。理窟といふものは、どういふ風にも或前提を認めておけば

書き立てられるものであるが、外國人からは、眉をひそめるやうな論議と認められる。その思想を打破しなければならぬといふのが、連合軍司令部の目的であつた。その趣旨に應じて、昭和二十一年元旦の詔勅には、天皇を現人神として神がかり的に見ることはまちがつてゐるといふことが明記されている。それはあたり前のことであるが、そのことはこれまで蔽はれてゐた、ただひとへに神がかりの思想が國民の間を風靡してゐた。

この思想は、或意味において精神主義の思想でもあつた。正しい意味での精神主義ではないが、道德性の優秀を力説するが如き意味において、精神主義であつた。果して道德性の優秀を誇るに足ることであるか否かは、東京裁判に暴露された、支那や南方諸國における非人道的な行爲によつて、すつかり否定されたことになつたが、いふところの趣旨は道德的精神の優れているといふ積りであつた。それが神がかりの思想と結び付いてゐた。神によつて作られ、神から引き續いた民族であると、前提すれば、それが最も道德的であるべきは當然である。けれども國際的に不道德的行爲が餘りに多かつたといふことは、そのことだけからいつても、神國などとはいへないわけである。いづれにしても、この思想が獨りよがりで排外的であつたことは争はれない事實である。そういふ思想が今もなほどこかに潜んでゐるとすれば、國運の文化的世界的進出の上に

妨げとなることは明白である。

この問題はこれまで各方面において語られてゐることであるので、こゝに多くを説く必要はあ
るまいと思ふが、これと聯關して我々日本人にはいろ／＼の方面において、神祕的な思想がある
のではないかといふことである。これは反面的には合理性が缺けてゐるとか、眞實性を尊ばない
とかいふことにもなるが、またすべて感情的にものを考へるとか、勘とか暗示とかでもものを推察
するといふような心の傾きのあることでもある。迷信なるものはどの國にもある。未開人には
いろ／＼の迷信がある。文明人には全くないかといふと、未開人同様の迷信はないが、形を變へ
た迷信がある。また理窟にはかなつてはいないが、過去からのいひ傳へで、今日の文明人も何と
なく氣に掛けてゐることもある。西洋には十三日とか金曜日といふ如きであるが、我國でも佛滅
とか友引きとかいふ名稱の下に、吉凶の示される日もある。その他、澤山の迷信のあることはい
ふまでもないことだが、智識の程度が異なるに従つて迷信も違つて表れることもある。中には科學
的迷信といはれることもある。醫藥などについてはさようにいふべき事柄もあるようである。

人智には際限もないことで、最後の眞理を突き止めることは不可能であらう。考へた末に、こ
れまで判らなかつたことが判り、新しい眞理は認められたわけであるが、それを更に深く廣く考

へると、それが最後のものでなく、それ以上深遠宏大な眞理のあることを豫想しなければならな
い。私は、知れば知るほど知らないことが多くなると説いてゐるが、既知の世界が擴大せられた
ときは、未知の世界も擴張されたときである。知識とは、知らないことを知つてゆくことであ
り、そこに知的生活の進歩があるのであるから、人智の進歩がある限りは、知つても知つても、
更に次に知らるべき知らない事柄の多く、知らない世界の廣いことを思はざるを得ない。そこで
私は愚者に疑問なく賢者に神祕があるといふのである。故に神祕的な思想は人間生活から免れる
ことは出来ないと思ふ。神祕主義なるものが哲學説においても行はれてゐることは、その方面の
研究者の知るところである。然しこれは知られないことがある、いかに究めても究めきれない世
界があるといふことで、直ぐは知られないことに、知られてゐるような意義をつけ、もつたいを
つけて、いはゞ神かかりに語るのではない。最近に出た神かゝりの婦人の如く、知られないこ
とを知れることのように語るのではない。もちろん不可思議な天地に對して哲學者のカントが、
大空の星を仰いで敬虔の意識を感じた如く、一種の尊嚴味を感じることはあるであらう。極めて
理論的な研究をなす科學者に、一種の神祕感を抱き、その意味で宗教的情緒を持つものはある。
これは、宏大な宇宙は人智に測り知れないものがあるので、これには合理性では盡し得ないある

ものゝ存し得べきことを考へて、敬虔の心を以て、これを眺め、謙遜の心を以て自ら世の中に處せねばならぬと感ずるものである。そこには、一種の宗教的意識がある。それが従來の既成宗教と通ずるところがあれば、その人は何教信者とも成り得るわけである。

けれども、これはいはゆる神かかり思想ではない。判つていないことを自分だけは判つていようと信じ説く神祕家ではない。或意味からは、平凡な合理的な態度でもある。ただ理論的に説いても説いても、盡し切れない問題が出てくるので、宇宙は人智では測り知れない不可思議があるといふだけである、いはゞ祕密があるといふだけである。その意味で神祕的とはいへる。しかし神の祕めてゐることを知つていふやうな神祕ではない。ところが神かかり思想と、どこかに共通するやうな神祕的思想は、判らないことを何となく知つていふやうに思ひ、判らぬところに重きを置きもつたいをつけて、そこに理論的な結論をも置かうとするものである。理論的にはまだ判らない測り知れない事柄がまだあるといふだけで、その意味で祕めてゐるといふことは自分には判つてゐるが、人に内緒にして祕めて置くといふやうなものではない。その判らないところを有難がつて、いはゞ御幣かつぎのやうな態度を取るものではない。然るに、我國民においては、一般的にはかりではなく、かゝる神祕的な考へ方が學者方面にもあるのではないか。それ

は必ずしも宗教意識の問題についていふのではない。理論的であるべき哲學的思考の問題についても、そういふ御幣かつぎのやうな思想がある。これは佛教思想には相當に多く見えているのである。判らない知れないといふのはよい。誠はかの知識で、知ることの出来ないものがあるといふのはよい。けれどもこれを調法がつて、何か他人にはのぞきかねる寶を自分は持つてゐるが如くに見せかけて、有難がらせをいふ態度である。科學者の神祕的な態度のそれとは相異なるものである。そういふ態度が今日の西洋哲學を學ぶものにもあるのではないか。或は先驗的といひ、或は無といひ、論理的な奥の世界にも何事か神祕的なものがあるとしてそれを根本原理として、それから學説を演釋するやうな態度はないか。判らない、理論的には表に取り出せない問題があるとしても、それは結局判らないのである。それを判つてゐるが如く、もつたいつけて、學徒の心を誘はうといふことは、いはゞ神かかり的態度と稱してよい。これらの問題は理論的に考察を要することであるが、一般的には我々はやたらに不思議がるのが好きである。そこにもつたいをつけて、考へることは、我が國民の一つの心理的特徴ではないかと思ふ。「さび」を尊ぶといふことは、趣味の生活にあるところであり、けばけばしいものを嫌つて、暗色を好む傾向のあるのは日本人の習性ともいふべきであるが、前にもいつたが、隠されてゐるところに眞理があると考

へるのと同じ心理である。これを稱して神祕的傾向があるといふのである。

こういふ思想傾向がどれだけ民主思想の普及徹底に妨げになるかは、表面からはいへないが、物事を出来るだけ明るいわかつた方面において考へて行かず、何か奥歯に物をはさんだような姿において行動することは、民主主義的精神に背く。わからぬことのあるのを認め、萬事に餘地をおいて考へるといふことはよいが、そのわからぬところに、もつたいをつけ何かそこに魅力があるように考へることは、物事を公明に考察しないことである。萬事ほがらかに語られ、わかるだけの方面において考察され、決議されなければならない時代に、いつも不明の影を潜めて、そこに何事かの種子があるように見なして行くことは、互に諒解し得る結論を生む方法ではない。世間では近頃よく、割り切れぬものがあると語るものがある。たしかに人事にも自然にも、理論的には割り切れないものがあることは認めなければならない。しかし出来るだけ割り切れるように理路をつくして行かねばならない。それでも遂に割り切れないものがあらう。それは致し方のない人智の常である。しかし日常の實際生活においては、どこかに限度をおいて決議し實行してゆかねばならない。然らざれば際限はない。始末はつかない。けれども常にわかり得る限りの方面において、人事はつくされなければならない。つくされないところは、後廻しにして、問題を處

理すべきである。然るに、その割り切れない何事に何かの神祕をおき、いはば影の動きを推測し、それが樂屋仕事をなして表に現はれている事柄が動かされているように思ふことは、實際生活における一種の神祕主義である。それでは、常に後から後へと問題を起して或程度で解決さるべきことも、なか／＼解決しかねるといふ始末になる。學問的にはこれは一種の研究的態度ともいへようが、實際生活においては常に陰影をおき、それを想像しながら物事を考察し處理しようとするものである。その態度からは、萬機を公論によつて決して行かうといふほがらかな正大な國民生活は出て來ない。

第十四章 宗教的意識の缺乏

宗教的意識がデモクラシー思想の普及徹底にいかなる關係があるかは、後に述べたいと思ふがこゝに宗教的意識が日本人には缺乏してゐるとは意外に思ふものがあるかも知れない。各市町村には神社佛閣があり、字の中にも數個の寺院を數へる處がある。そして神詣で佛參りは全國至るところに行はれているので、宗教思想が足りないとは認められないではないかといふ異論があら

う。各國の寺院や教會の數と比較して、いづれが多いかはしらないが、確かに神社殊に寺院が多い。その維持には、檀家も相當頭をなやましている様子である。故に數量的に見へるところについていへば、宗教意識は濃厚であるといへばいへるのである。けれどもしさいに觀察すると、それは傳統的な習慣、行事に終ることが多い。寺は祖先の墳墓のあるところとして、檀家の人々に相當敬意を拂はれている。即ちお寺は祖先への法事をするところであり、墓を守るところとして尊ばれている。しかしこれは傳統的の習慣を重するといふだけで、原始的の民族信仰にもあるような、祖先崇拜の心持が横はるだけである。特にその佛教の教理とか佛教の信仰とかいふ高い人生觀宗教觀と、佛を尊ぶ宗教心とが、内面的に結びついているのではない。檀家といふのも多くは祖先傳來のお寺だといふことだけであつて、個人の眞の生きた信仰には、それほどの關係はなく、いはゞ宿命的に佛徒であるといふだけである。また僧侶の行事は、折節の葬式を行ひ、一定の季節の佛事を行ふだけである。特別に宗教講話をするとか、民衆教化の運動にたづさわるとかいふことはまれである。生活業のためには、田畑をも耕し、養蠶をもせねばならぬ状態にもあるが、本來の宗教家としての生活としては、墓や葬儀に關係ある面においてのみ民衆と結ばれている有様である。久しき傳統の力は、佛教の勢力を國民の實際生活からぬきとることはむづかしい

が、積極的にいかなる宗教的な精神的な功德を及ぼしてゐるかを見ると、その極めて薄弱なることを思はざるを得ない。佛教界の革新の聲も叫ばれているが、何等社會の新運動として現はれて來ないのは、このためである。この意味から佛教を通して、日本人の宗教意識は強く現はれてゐるとは思はれない。

宮参りやお寺参りをする人は、從來相當にあつたことはたしかである。鐵道の敷設も神社佛閣のあるところを選ぶのが得策であるといはれている。これら参詣する人々の心の中にはなんらか單なる物質的のものでない精神的な安心を求むる人もあるであらうが、これを一つの花見遊山と同じように心得るものもある。またいくらかの賽錢を投じて、澤山の利益を恵んでもらひたいように心得るものも相當にあるであらう。その参詣行事が深い道德的な實踐的な修養にどれだけの關係をもつて來ているかは疑問である。これも習慣的な月並行事に墮するものが多い。かように見て來ると、かゝる社會現象にも國民の宗教意識がつよく現はれてゐると思はれない。單なる御利益を願ふ行爲であると思へばあまりほめたことではあるまい。

しかし終戦前の軍國時代においては、宗教意識は盛であつたのではないかといふものがあるかも知れない。これも外形的に觀察すれば、一應そうだといふ得ることである。國民儀禮と稱して

毎日の様に或は朝から晩まで、一種の宗教的儀禮が行はれて来たことは、人のしるところである。宮城へ向つての儀式も宗教的な儀式的なものであり、英靈に對する感謝祈念といひ、いづれも宗教的儀式的なものである。かゝる儀式はおもに神社の前に行はれ、また臨時の神殿を造るか、或はある神社の方向を想定して、いはゆる神々を祈念する形式において行はれたのである。けれども、かゝる神社は、平生の場合においては、元日とか七五三とかいふ一定のお祭の日においてのみ市町村民は習慣的な敬意を表して参詣するものもあつたが、平生の生活においては、眞の宗教意味においては、氣の遠いものであつた。各戸に神棚は設けられていたが、戦時中は強制的なものであつた。田舎などには昔からこの家にも備へられていたが、傳統的、習慣的のものであつて、その前に立つて宗教的・道徳的意識をかへりみて修養しようといふ態度は乏しかつた。もちろんいづれもなにか宗教的意識は動いているが、それは淡いものであつて、人としての社会的、道徳的自覺といふような面から見ると、幼稚のまゝにとり残されていた感がある。その意味から、われ／＼の宗教意識は深刻なものでないといひ得るのである。

戦時に行はれた國民儀禮といふのは、一種の團體行事であつて、號令によつて行はれた。心あつたものが集まつて、何人かのちかひによつて、宗教的行事が行はれ得ることはさしつかへないこ

とであるが、その當時の行事は、それに參加しないと何となく異端視されて困る。そこで後難を恐れて出かけるような有様であつた。そうでなく、その行事が眞面目に行はれたとしても、行事後の會衆の行動を見ると、それで先づ用が済んだといふような態度であつた。しまひには、あまりに同じような行事が繰り返されて、たゞ型の如くなるばかりで、時間の空費とさへ考へるに至つた。行事後に内容のある會議や相談が行はれることは乏しかつたからである。これらの事柄を今更らくだ／＼しく述べる必要もなく、だれも承知のことと思ふが、問題はかくも頻繁に行はれた一種の宗教的行事が、何程國民のまじめな宗教心に基礎づけられていたか。また深い宗教意識を養成する事に貢献することがあつたかといふことである。終戦後の状態を見ると、無宗教無道徳の有様に國民の心はさ迷うている有様である。もとより神社を國家的にとり扱つたり、官權の號令の許に戦勝祈願をするようなやり方は禁止されたが、各個人が自由に信仰心をいだいて御宮参りやお寺参りをなすことは信教の自由として認められている。以前の如く號令的に宗教儀式が行はれることは信仰の道理に合はないことであるが、もし各人の心から拜みに行かねばならない寺参りに行かなければならないと、やみ難き宗教意識が起つていゝならば、終戦後においても神社や寺院にお参りしてしかるべきである。もちろん戦時中は官權の宣傳によつて自國のみが

正義であり、それがために戦勝を祈念することは、いはゞあざむかれたのであり、大きな過をおかしたのである。それ故にそれを悔悟して改悛の念を申上げると共に、今後は正しい平和と美しい人道のために、自分の生活が神や佛の力によつて遂げられるようにと祈願して然るべきである、眞に宗教的な道徳的な意識があり、信仰心が深く宿つてゐるならば、そつういふ行爲があつて、然るべきであるが、終戦後それらのけはいは少しも見えず、あたかも神も佛もない世の中のように心得て、自墮落の生活を行ふ有様になつてゐることは、どう考へても眞の宗教的、道徳的意識がわれ／＼の心に養はれてゐるとは思はれ難い。

一體戦時中の祈願の意識についても、眞の宗教的、道徳的思想から批判すべきことがある。戦争中戦勝を祈ることは、どこの國においても行はれたことであらう。まさかに敗るようにと祈るものはあるまい。しかし勝つことを祈るにしても、眞劍の宗教的道徳的意識の深い反省が行はれなければならぬ。自分の國は本來えらいのであるとか、敵國はことごとく邪道の國であるとか前提して、神佛の前には是非勝たしてもらひたいと祈ることは、神佛を冒瀆するものであるといつてよい。それはいはゞ道徳的利己主義の考である。利己主義とは金銭や名譽にばかり限つたことでもない。自分ばかりが善であると、頭から一人決めにするもので、いはゞ善を私するものであ

る。善き人間であらしめたまへ、よき國であらしめ給へ、戦争についても正しき道をとらしめ給へ、もし自國が悪ければ充分にこらしめ給へ、ひとへに我が念慮を自國のためにも敵國のためにも美しくして、神佛の導きをまつばかりであるといふやうな、眞に良心的な公明な態度で戦勝を祈るならば、それは誠に道徳的宗教的である。その場合においては、戦勝を得なくとも、自國の心にそれも神佛の思召しとして安んずるところがなければならぬ。神佛に祈るものは、決して利己主義者であつてはならない。個人の場合においても國家の場合においても同理である。然るに戦争中の宗教的な祈願に、これほどの良心的な心構えがあつたかは極めて怪しい。すでに官權の宣傳する思想そのものが、自國本意な利己主義なものであり、諸國民の道徳的良心に普くうつたへ得るような高潔なものではなかつた。従つてそれに添うての宗教的諸儀式が利己主義的であり、眞の道徳的意識の涵養には役立ち得なかつたのは當然である。即ち戦時中の宗教的儀式は形式的、官僚的なものであつて、眞の宗教的なものとは認められなかつたことを語る。それ故に終戦後においては、國民の無宗教無道徳な社會があらはれ現に示されるに至つたのである。この故に、われ／＼日本人には眞の宗教意識が乏しいことを思はざるを得ないのである。

我が國の宗教には、佛教と宗派神道とが、宗教のほとんど全部であるように多いことは、人の

知れるところである。そして神道にも佛教にも、その中に著名の宗派のあることも人の知るところである。佛教は支那を通してインドから傳はり、神道は原始的な祖先教に、佛教思想の加味されたものである。その教義としては、佛教のやうな哲學的思想はない。通俗的な御利益思想が多いと稱されている。もつともその教義には道德倫理の説明もあるが、信仰の歸するところは、廣い意味でのいはゆる御利益である。佛教の教理には高遠な哲學的思想もあるが、國民の生活の中に喰入つて流れているところは、祖先の靈への仲介をとるところであり、また氣局極樂往生の個人的な来世の願である。もとよりそれが宗教意識の缺くべからざる要素をなしていることは、明らかであるが、道德的社會的生活に連關して、宗教意識を動かしているところが乏しい。現世から來世に至るまでの宗教心はかれこれと述べられているが、現實の家庭生活には社會協同生活を通して、宗教味豊かに活動するやうな心構は養はれていない。いひ換へれば、社會的、公共的ないはゞ世間的な仕事にたづさはるときに、その中に宗教意識を強くいだき、それが佛の道になふところであるとか、これが眞の宗教生活であるとかいふ風に、現實な社會活動の中に宗教的な魂を打ち込んで活動するものは少ない。宗教心の道德化され社會化されるといふか、社會的徳心が宗教化されるといふか、いづれにしても、宗教心と社會的徳徳心とが強く結ばれている面

が乏しい。最近では基督教の社會活動にならつて、托兒所を設けるとか、保育所を設けるとか、その他社會的施設をなすことにつとめているものもあるが、それは微々たるものであらう。こゝろいふ意味において、日本國民に宗教的な意識が全く缺けているとはいへないが、その信仰の意味が極めて狭く、個人的な後生生活に限られてゐる感がある。宗教的な情熱を以て社會面の活動に動くといふ面が乏しい。宗教心はそこらまで廣く深くのび、社會生活における各種の實踐的行動の中に、信仰意識の喜びを感ずるといふやうなものでなければならぬ。その點においては、基督教の方がはるかに宗教的、道德的意識に富んでゐるといはなければならぬ。

佛教がこのままでとまるべきであるか、とまる運命になつてゐるかは、次の問題であるが、とにかく基督教が我が國においては新興の宗教である限りにおいて、その宗教的活動の活潑なることを認めざるを得ない。佛教の信徒といふのは、祖先傳來の檀徒であるとか、僧侶の家に育つたとかいふ因縁を措いては、新に佛教徒となるものは少ない。もとより家つきによつて、既に佛教徒であるから、改めて佛教徒なることを告白するには當るまいが、ともかく普通の人間がいはゆる發心して佛教徒となるものは極めて少ない。どうかすると、その人は僧侶職になるやうであるが、僧籍に入らずに、普通の業務にたづさはりながら、信仰を得て、その心持の許に活動す

るものは少ないようである。それもどうかするとただ佛事に熱心であるといふことで、その心をもつて新に信仰を得た人々を誘ひ集め、信仰家の立場を土臺に置いて、社會活動をするといふような態度はあまり考へない。これは、私の見聞のせまいためであるかも知れないが、キリスト教においては、信者が結合してその精神に基き、社會活動をしてゐる事柄は澤山にある。要するに、佛教においては個人の後生的な心的生活の中に限られて、社會活動にまで宗教意識が動き出して行かないように見へるが、キリスト教においては、それが澤山に見えてゐる。これもキリスト教は我が國においての新らしき宗教であるからのためでもあるかも知れないが、宗教意識と社會的意識とが、良心的に結合することは極めて大切のことである。それがやゝもすると、迷信化さうとする宗教意識を道徳的、合理的にならしめ、やゝもすれば表面的形式的にならうとする社會的、道徳的精神を、深く宗教的意識に結合せしめるところがあるからである。

宗教と道徳との關係の如き問題は、改めて論ずるに價すること、こゝに多く語るいとまはないが、我が國民の宗教意識を見ると、個人的利己主義的にながれ、道徳的良心的反省にまで深くしみ込んでいないことは上述の如くである。孔子の教へには「丘や祈ること久し」といふ文句もあり、天理、天命に通ずるといふ意味で、おのづから宗教意識の通つてゐるところもある。ま

た至誠神の如しとか、正直の頭には神宿るとか、その他の處世訓には宗教的意識と道徳心とが結合されて教へられているが、從來の宗教意識にはかやうな道徳性につながるところが少ない。また道徳の教へは、學校の修身科などにおいて相當に立派な精神が説かれてゐるが、それが青少年の宗教的な情緒に通つて説れるところが乏しいので、いはゆる善言佳語の繰りかへしに終り、天地神明に通ずるとか、俯仰天地に恥じないとか、孟子のいはゆる浩然の氣を養ふとかいふ意識に達していない。即ち我の一善一悪は、國家の一善一悪であり、やがては全人類の一善一悪でありよき正しき美しき心はいはゞ神佛にも通ずるものであり、宇宙の大靈といふか絶対的生命といふか、何か深い、我をつゝみ我を超えている大きな精神的存在につながるものであるといふような心持が乏しい。そこで一面には宗教心は利己的にもなり、形式的にもなり、傳統的習慣ともなつて、世の中の仕事の上には働きをなさないと同時に、他面には道徳心はお體裁や見榮のあいさつの言葉となり、實踐的に人に見えざるところ、聞えざるところに、自律的にまじめに善を行ふといふ決心をかためしむるに至らない。そこに我が國民の精神生活の缺陷を見出さざるを得ないのである。

さてかように述べて來ると、かゝる宗教的意識の缺乏が、民主思想の確立と普及徹底とにいか

やうな關係をもつて來るかが、次に問はれねばならない問題である。表面的には關係は少ないように思はれるが、内面的には深い關係があると思ふ。民主主義思想とは、世間で簡単に思はれてゐるやうに多勢が集まつて、多勢のために多数で決めるのだといふやうに、表面的な解釋だけに終つてゐるならば、宗教意識がどうのここのといふやうな問題にはならない。私がしばしば述べて來たやうに、民主主義の思想は、民をなしてゐる各人の人格的基礎の上になり立たなければならぬ。民論とか輿論とか衆意とかいつても、結局はその社會生活のよき粒である個人の良心的な自覺に基づいて意見が交換され、それによつて國民の總意として結ばれたものでなければならぬ。然るに個人としての人格は低く責任の意識は乏しく、従つてかゝる人々によつて出來た輿論とは、いはゆる無錢遊興的な輿論であり、浮動して常ならぬ輿論であるならば、いはゆる愚衆の聲であつて、道徳的に是認し得べき意見の總合でないことは明白である。そしてこの人格の自覺といふことは個人の尊嚴を認め、各々の個人は社會的生命を帯びてゐる社會的存在であることとを悟り、その個人の良心的活動は、國家社會生活の全般に通じ、また人類の生活に連なり、そのいだいてゐる道理は人生宇宙の原理としても考へられるのである。孔子が「朝に道をきけば夕に死しても可なり」といつた如く、個人の言動は深い大きい精神生活に通ずるといつたやうな心

構えを持たなければならぬのである。その意味においての人格としての自覺とその責任ある行動は、宗教意識に通ずるところがなければならぬのである。かやうな意識に立つことにおいてのみその言論はまじめに主張され、他人の意見は慎重に傾聴され、かくて眞實の輿論が成り立つ譯である。かくて堅實な民主思想は確立するのである。この意味において、深い宗教的意識があることが、まじめなしつかりした民主主義生活をいとまましむるに基礎的な關係があることが明白になる。

先に述べた如く、我が國民の宗教意識が寺院の境内の中に存してそれ以外に出ず、社會活動についての熱心な行動を呼び起すに至らないことは、民主主義の思想的實行をいとまましむるに不適當であると稱してよい。佛教の教説そのものがどの程度にまで民主思想と一致し得べきかは別に研究を要することであるが、とにかく社會活動の中に宗教心が生きて働き得ない状態にあることは、民主主義思想の普及徹底に原動力を持ち得ないのである。何となれば、民主的思想活動は現實な思想的社會的事業であるからである。そういふ社會面に宗教意識が内的關係をもつていないとすれば、宗教心そのものが民主思想の啓培には、不適當のものとなる。また社會意識の中に宗教心を織り込むことの出來ないやうな宗教は、今いつた如く、深い精神的な培養を要する、民

主思想の發達に力を與へることは出来ない。いひかへれば民主思想の確立は人格的、内面的な基礎とするので宗教的意識にまで深く根づいておくことを必要とする。然るに我が國民にかゝる社會性を持つた宗教意識が缺けているとすれば、民主主義を國民の心の奥から打ち樹てることは覺束ないといふことになる。

先頃マツカーサー元帥の意見として、現代ほどキリスト教の日本に紹介され普及されべき好期はないと語られてゐる。以上の解釋からいふと、キリスト教は佛教に比して、はるかに社會面の活動に富んでゐる。もちろん宗教としては内面的な精神的生活に根據を持ち、宇宙觀、人生觀に根柢を持つべきものであることはいふまでもない。その點においては、教理の説き方こそちがへ、その深い問題に立ち入つてゐることはキリスト教も佛教も同じである。或は佛教の方が哲學的教理としては深遠なものがあつても知れない。もつともキリスト教神學の如きにおいては、いくたの學説があるので簡單には批評されないが、佛教の方がいはゆる哲學的だといはれてゐる。そのかはり人格的道德的な生活に接觸せる面は、キリスト教の方が深刻であるかも知れない。かゝる論議はさて置き、キリスト教の方が、牧師以外の信者の社會的活動が活潑である。そのことが社會生活の改造に多大の效力を及ぼして來たことは人の認むるところである。宗教が常人の社

會生活と遊離せず、個人の心を通して社會面の活動に、その力を及ぼしてゐることはキリスト教の長所である。その社會活動の中には信仰の魂が動いてゐる。そして民主主義運動の如きは、最も大切な社會生活の活動である。そこに自己を純化するやうな宗教的意識が働き、自己の活動を社會の公僕として、やがてそれは神への公僕として、まじめに良心的な生活を行ひ、かくて新しい國家社會生活を打ち樹てるといふことは、願はしきことである。それは佛教徒によつても、宗派神道によつても行はれて然るべきであるが、舊來の宗教家或は信徒の間にかゝる精神的な心構えが乏しいとすれば、その場面に活潑に活動し得べきものは、キリスト教信者であると認めなければならぬ。その點から考察して、現代こそは、キリスト教が日本に普及さるべき好個の時代であると語られるのも道理のあることである。米國から日本に食料品を送るにも、キリスト教徒の社會的人道的精神が働いてゐるであらう。殊にキリスト教徒の文化的使命として、我が國に大きな総合キリスト教的大學を建設せんとして、幾億の巨費が寄附せられんとしている如きは、宗教意識がいかに社會活動の内面に活潑に動いてゐるかを示すものである。奉賀帳をもつて寺院や神社の維持にのみ苦心しているが如き我が國從來の宗教家は、その寺院内的態度を打ち棄て、廣く民衆の社會生活の上に、宗教意識が織り込まれて一大新運動を起さしむるだけの覺悟

がなければならぬと思ふ。

要するに、我が國民に宗教意識がないわけではないが、それが洗練、向上、擴大されていない。結局眞の宗教的意識がどれだけでもたれていくが、私の大に懸念とするところである。御利益主義的な宗教意識はあるが、社會的・道徳的生活の中にまで喰ひ入っていない。良心の聲は神の聲であるといふことは、ソクラテス時代から西洋でははれたことであるが、また西洋の賢哲の懺悔録に見るように、宗教的意識と良心的苦悶とが一緒にからみ合つて、深刻に働いているような場面が我が國民の宗教心に乏しいことは、こゝに眞の意味でも、宗教的意識の乏しいことを語るものである。何事もおさなりに濟まして行かうといふような淺薄な思想生活が、我が國民の心の中に存するのではないかと思ふと深憂に堪えない。いづれにしてもデモクラシーの思想生活は、かゝる内面的な基礎に立つのでなければ、泡沫のやうな民主運動を、よせてはかへず岸邊の波の如く繰り返すだけになるであらう。

14442

昭和二十三年六月一日印刷
昭和二十三年六月五日發行

デモクラシーと我が國民性

定價 金百五拾圓

著者	大島正徳
發行者	東京都新宿區拂方町二七 佐藤正叟
印刷者	東京都新宿區神樂町一〇二 小酒井益藏
發行所	東京都新宿區拂方町二七 至文堂



會員番號A一一九〇二〇番
電話九段(33)一四一五番
振替口座東京二九五〇七番

東京都千代田區神田淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

研究社印刷所印刷

元東大教授 大島正徳著

現代實在論の研究

送價三
一五〇圓

哲學概論

送價二
〇〇圓

新倫理學概論

送價一
五〇圓

デモクラシーの基本概念

送價一
五〇圓

年 月 日 3

22.9.22	22.9.22	22.9.21	22.9.21	22.9.21	22.9.21	22.9.21	22.9.21	22.9.21	22.9.21
22.11.10	22.11.10	22.11.10	22.11.10	22.11.10	22.11.10	22.11.10	22.11.10	22.11.10	22.11.10
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22
22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22	22.11.22

閱覽濟

昭和廿參年九月拾八日



